新入生へのエール

徳島県保健福祉部医療健康総局次長
佐野 雄二 さの ゆうじ

徳島大学のイメージについて

私は県西部に育ちましたが、まことに徳大は大きな存在でした。そして故郷の大学として、県外や国外から見つめてきました。今は行政の立場から、毎年、徳島大学との接点が増え、より身近な存在となっています。その姿は幼い時の印象とは異なるものの大きな存在であることに変わりはありません。

しかし講義の折りなどに学生の皆さんと話していて、少し徳大の印象が異なっていることが気になりました。一地方大学というイメージだったのです。特に県外から入学した方に多い印象でした。そこで「徳島大学五十年史」、大学ランキング等を確認しました。世界のトップレベルの大学の姿であり、私が国内外で感じた伝統と高い評価の印象を裏付けてくれました。

学ぶことは受動的ではなく、極めて能動的な行為です。自らが学ぶ大学への誇りと理解が高いほど積極的になります。世界のトップレベルの大学で学ぶことの大きな誇りを持っていただきたいと思います。

なぜ学ぶのか

新入生の皆さんに恐縮ですが、私は「なぜ学ぶのか」わからずに大学入学しました。大学に入って、昔の太平洋の島々の風習を記録した本を読み、我々にとって異質な風習や行動も、その背景にある論理を求めることによって理解できることを知りました。歴史や言語を学ぶことの意義が見えてきました。学びの尺度は、最も自分と離れた生育背景の人々のことを理解することではないかと考え、このことは多くの国の人との出会いの中で確認できました。

こうしたことは、医療や工学に携わる方には不要と映るかもしれません。しかし技術を活かすのも、相手は人であり裾野の広い理解が必要です。同じ高さでも細い塔ではなく、裾野の広い山が望ましいのです。一例をあげれば、私自身、医療に携わって未だに答えられない「問い」があります。患者さんからの「どうしてこうした病気になったのでしょうか」という問いです。病気の説明をしていましたが、「正しい道を歩んできた自分にこうした苦難が降りかかるのは何故なのか」という、宗教や哲学に関係した重い問いであることに、途中で気づきました。この時に学ぶことの深淵を見た思いがしました。「なぜ学ぶか」や、上記の「問い」の答えは、一人ひとりで異なるはずです。こうしたことを考える基盤を作るのが大学時代と思います。

最後に

新入生の皆さんが徳島大学のモットーである「知を創り、地域に生き、世界にはばたく」ことを期待し、心からのエールを送らせていただきます。徳島大学が創立60周年を機に、さらなる飛躍を遂げられ、輝く未来を迎えられることをお祈りいたします。

徳島大学のランキング

●平成18年度大学教育改革支援事業（文部科学省）
採択課題数　6件　2位（87国立大学中）

●平成21年度
科学研究費補助金の研究機関別採択件数（文部科学省編）
新規採択分　193件　20位
新規採択分＋継続分 369件　23位
※研究機関：1,158機関（国公私立大学、大学共同利用機関、その他研究機関等）

●共同・受託研究及びライセンス契約事例の評価
（経済産業省 H18.6.6発表）
比較的優れた産学連携活動を実施している大学として7位の評価

略歴
1952年 徳島県生
1978年 鹿児島大学医学部卒業、神経内科医として
大学、市立病院、国立療養所、離島診療所等で勤務
1986年 米国メリーランド大学リサーチフェロー（補体免疫学）
1988年 徳島大学病院
1990年 徳島県穴吹保健所長、以後、阿南、徳島保健所長を経て
2002年から徳島県庁の保健福祉部に勤務

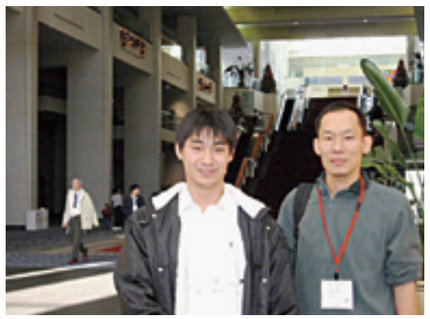
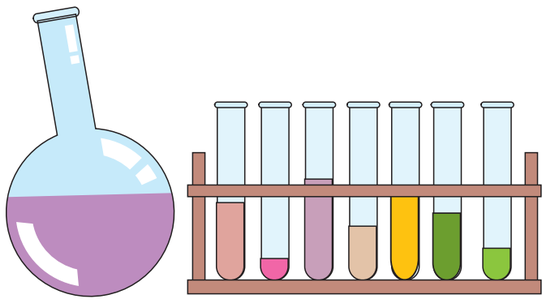
資格：　徳島大学非常勤講師（公衆衛生）
医学博士、英国王立学会員、神経内科専門医、等
趣味：　医学史

自己責任

金沢大学がん研究所細胞機能統御研究分野 准教授
滝野 隆久 たきの たかひさ

私は、平成2年に徳島大学歯学部を卒業後、地元での開業を志して金沢大学医学部歯科口腔外科に入局しました。一般歯科と口腔外科が共存する医局で楽しい日々を過ごしていましたが、口腔癌浸潤を研究テーマとする山本悦秀教授に感化されて大学院に入学し、金沢大学がん研究所清木元治教授（現東京大学医科学研究所長）の下で癌浸潤における蛋白分解酵素の役割に注目した研究を始めました。学生時代には毎年留年候補に挙がるほど超低空飛行をしていたため、最初は研究室での日常会話（専門用語や英語）が全く理解できませんでした。これまで真面目に勉強してこなかったことを後悔しましたが、周囲に追いつくために必死で勉強しました。少しずつ実験結果が出始めると研究を楽しめるようになり、「世界が競争相手だ」という清木先生の言葉に陶酔し、研究にどんどんのめり込んでいきました。大学院修了後は歯科医を辞めて研究を続行することに、不思議と違和感はありませんでした。米国に留学後、金沢大学がん研究所にスタッフとして戻りました。現代でも最大の死因である「がん」研究には垣根が無いようで、がん研究所のスタッフの出身学部は、医学、薬学、獣医学、理学、工学、農学、水産学、歯学と多岐にわたっています。研究内容も発癌、免疫、幹細胞、神経、細胞浸潤と広範囲です。個性溢れる研究者達に刺激され、協力してもらい、日々研究に勤しんでます。

研究所の利点は、教育が占める割合が学部よりも低いため研究に集中できる点にあります。研究者の仕事とは、自分が明確にしたいことに対して具体的な研究計画を立案し、研究資金を獲得し、成果を出す、の繰り返しです。従って、短期あるいは長期のサイクルで他の研究者達に成果を認めてもらうことが必要になります。競争の激しい厳しい職業かもしれませんが、研究する自由と世界に挑戦するチャンスを得ていることが励みになっています。

ヒトの一生は意外と長い。ですから、生きている限り大抵のことはやり直せます。普遍的に正しい選択など存在せず、その瞬間に自分の納得のいく選択を行えば、それが正しい選択だと思います。恐らく最も大事なことは、自分が選択した以上は自己責任としてその道で必死に頑張ってみることだと思います。暫く進んだ後、振り返って客観的に自分の判断を評価してみると、案外納得してしまうものです。納得できなければ、再び自分で新しい道を切り開くだけです。私自身の選択の正否など考えたことはありませんが、研究に追われる毎日を有意義に過ごしていることは確かです。在学生の皆さん、今しか存在しないこの瞬間を悔いの残らないように頑張り、楽しんで下さい。

略歴
1965年 石川県金沢市生まれ
1990年 徳島大学歯学部歯学科卒業
金沢大学医学部附属病院医員(歯科口腔外科)
1995年 日本学術振興会特別研究員
1997年 米国国立衛生研究所(ＮＩＨ)客員研究員
1998年 日本学術振興会海外特別研究員
1999年 金沢大学がん研究所助手
2003年 同准教授